著者プロフィール
田中俊光（たなか・としみつ） 1979 年東京都生まれ。2002 年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013 年 3 月に独立し㈱ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011 年、「ユニソン フォトコンテスト 2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014 年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014 年「第 2 回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017 年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト 2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー 1 級、二級建築士。

第４回　食い潰してはいけない、先人の暮らしの技術

前回は、健全な山と不健全な山の環境を比較しましたが、今回は、昔と今の住まいの環境を見てみたいと思います。

写真1は、静岡県浜松市天竜の里山に残る築２００年を越す古民家です。この集落は、室町時代から続く集落だそうです。この古民家を含め周囲の里山を、私の友人である木こりが譲り受け、１００年先にも地域の人たちに必要される森にしたいと活動しています。

多少傷みながらも残っているこの古民家は、先祖の方々が日本の風土を読み取り、自然と共に暮らす視点や技術を養うことで現代へと伝承されてきた、まさに結晶だと思います。

古民家の西側には、人が植えたであろうマキや杉が石垣と共に今も残っています（**写真2**）。杉は専門家に調べてもらうと樹齢５００年も超えているそうです。この木々が家を壊すことなく逆に守ってくれ今まで、古民家が生存できていたと思われます。

地域は変わりますが、富山県砺波平野の散居村（**写真3**）では、『高は売ってもカイニョは売るな』と代々言い伝わる言葉があります。高とは土地や建物のこと、カイニョとは垣根からきている言葉で屋敷林のことをさします。

この地域では、家の周りに林を作り家と共に大切に守るように伝承されてきました。屋敷林は冬の強い風や夏の強い日差しから家を守るためであったり、この地域は山から遠い場所なので屋敷林には杉を植え、建築のメンテナンスの材料とされたり、落ち葉は燃料として使われたりしていました。屋敷林が生活に欠かせないものであり、屋敷林なしでは家は成り立つことができませんでした。家と共に屋敷林があり、自然に寄り添って人と自然が共存するシフトができていたのです。

さて写真1の天竜の古民家は、先祖の方々が家を守るためにこの杉たちを大切に守り管理し、伝承されてきたものだと思います。

大きな杉の木が石垣を崩さずに木と石が何百年も共存する姿がここにはあります（**写真4**）。石垣と植物の根の立体的

写真１　静岡県浜松市天竜の里山に残る築 200 年を越す古民家

写真２　マキや杉が石垣と共に今も残る

大地の再生　連載

造園家　田中俊光
（㈱ナインスケッチ代表）

セメントを使わずに、何百年も保つことができる人工地形。石垣も崩れず木と石が共存可能

写真３　富山県砺波平野の散居村の屋敷林

したがって本来の自然素材を使った土木を、今こそ見直すべきではないでしょうか。

昔の住まいも人の手によって造成されてきましたが、少なくとも自然素材を使い、しっかりと空気と水が循環するような作り方が行われていました。建物の基礎は石を用いて、なるべく大地に負荷を掛けないように点で受けるようにしました。そして建物の周りには木々を植え、土を留めるにしても石と木の根で安定させるようにし、生活排水は素掘りの側溝でその土地に水と空気が循環できるように浸透させていました。

今の住まいはというと、しっかりと重機などで大地を締固め、建物の基礎はコンクリート、外周もコンクリートの塀などで囲み、排水はコンクリート製のU字溝や塩ビパイプで処理し、道路はアスファルトやコンクリート舗装、川は3面張りのコンクリートです。どこを見ても水も空気も循環できない環境になってしまいました。

今後、我々が行う造成や外構工事では、なるべく石と木を使い、空気と水が循環できる有機的な空間づくりを増やしていければ良いと思います。そうすれば、地下も地上も心地よい空気が流れ、人にとっても快適で過ごしやすい空間になると思います。もちろん、法規制等でコンクリートを使わざるを得ないことがありますが、コンクリートを使うのであれば、その分、空気と水が循環できるような取り組みをすればいいと思います。

戦後そして高度成長から現代に続く自然素材を使わない空間づくりによって、先人たちが築いた自然と共存した暮らしの結晶は一気に食い潰されてきてしまいました。このままでは人は住めない環境になってしまうかもしれません。もう一度、先人の人たちが日常の作業を通して何百年も伝えられた自然に寄り添った暮らしの技術を見直し、強度がある現代のコンクリート技術と有機物をうまく融合させる技術を確立させれば、人も自然も共存できる空間が実現できると思います。

写真４　大きな杉の木が石垣を崩さずに木と石が何百年も共存する姿

な組み合わせで土圧を支え、浸透してきた水も分散させ敷地を安定してくれています。

植物の根が石垣を崩さないで安定させるには空気と水が程よく循環していないと保たれません。逆に、土の中に空気と水が動く視点や技術があれば、セメントを使わなくても何百年も人工地形も保つことができるのです。コンクリートは寿命があり、やがて劣化します。それに対して、自然の石と木の組み合わせの方が強いということを、この天竜の事例が証明してくれているのです。

土木という字は、「土」と「木」です。

連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいると、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？―田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に出会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。